

人数表現に関わる数詞の用法

——『源氏物語』『平家物語』を対象として——

柚 木 靖 史

はじめに

山田孝雄博士は、文の主格に立つことができ、活用をせず、格助詞を伴って、他の語に対して様々な関係に立つような語を体言とし、さらにそれを実質体言と形式体言とに下位分類して、形式体言の一つに数詞を立てられた。数詞の用法については、山田孝雄博士や橋本進吉博士によって既に指摘されているように、副詞のように連用格に立つことができる⁽¹⁾ことは夙に知られているところである。数詞の連用用法については、現代語研究においては早くから注目され、現在までに多くの論考が提出され、成果を上げている⁽²⁾。

本稿では、数詞の用法について、古文を対象に考察していくことを目的とする。ここでは、その一階梯として、源氏物語と平家物語をとりあげることにした。時代差という視点も取り入

れようと考えたからである。先に掲げた目的を達するためには、この二作品だけの考察では不十分ではあるが、数詞の用法についてとりあえず両作品で比較検討しておくことにより、今後の研究の方向付けを得たいと考えている。テキストとして、源氏物語は源氏物語大成を使用し、平家物語は新日本古典文学大系(岩波書店)を使用した。以下に掲げる用例の下に丸括弧で示した数字は、用例の所在箇所を示している。尚、用例中の句読点、濁点などは私に施した。

また、本稿では、「一人」「二人」「三人」といった、人数を表す数詞のみを取り上げている。数詞を使った表現は、二作品だけでも多量の用例数にのぼることから、限られた紙面ではそれらを整理しきれないと考えたからで、他の表現については稿を改めて述べたいと考えている。

さて、数詞の文中での使われ方は様々である。これを、現代文を例にして確認しておこう。例えば、ここで、「学生が三人い

て、彼等が話している」という状況を述べる文、つまり「学生」「三人」「話している」という三つの情報を伝える文を、「三人」という数詞の位置を変えて表現すれば、おおよそ次のような幾通りかの文が成立する。

- A 学生が三人話している。
- B 三人、学生が話している。
- C 学生三人が話している。
- D 三人の学生が話している
- E 学生の三人が話している。
- F 話しているのは、三人の学生だ。
- G 話しているのは、学生の三人だ。
- H 話しているのは、学生三人だ。
- I 話している学生は、三人だ。
- J 話している三人は、学生だ。

以上は、筆者の内省により文を作成したものであるが、この他にも「学生で、話しているのは三人だ」等の表現も含めれば、かなりの数の文例を挙げることができよう。ここで、AからJの文例に使われた「三人」という数詞について、その文法的働きを簡単にまとめておくこととする。

A 「三人」は連用格に立つ。以下、このような数詞の使われ方を「名詞／数詞（連用法）」と記す。⁽³⁾

B 「三人」は連用格に立つ。これは、被修飾語とは離れた位置から修飾するもので、Aの変形といえよう。

C 「三人」は名詞と直に結び付いて、「学生三人」という形で主格に立つ。この際、数詞は、名詞に下接する。以下、このような数詞の使われ方を、「名詞＋数詞」一体型と記す。⁽⁴⁾

- D 「三人」は主格を構成する句の中の連体格に立つ。
- E 「三人」は「学生の」という修飾語を伴い主格に立つ。
- F 「三人」は述格を構成する句の中の連体格に立つ。
- G 「三人」は「学生の」という修飾語を伴い述格に立つ。
- H 「三人」は名詞と直に結び付いて、「学生三人」という形で述格に立つ。
- I 「三人だ」という形で、述格に立つ。
- J 「三人」は「話している」という修飾語を伴い主格に立つ。

以上、現代文を例にして、数詞を使つたいくつかの表現を提示し、それぞれの文における数詞の文法的働きについてまとめてきた。これをみると、数詞の文法的働きには、いくつかの型が認められるようである。名詞との関係からいえば、「三人だ」のように名詞との組み合わせで使われないもの、「学生三人」「三人の学生」のように名詞との組み合わせで使われるものがあり、後者には、「三人の学生」のように数詞が名詞の上にくるものと、「学生の三人」「学生三人」のように数詞が名詞の下にくるもの

とがある。数詞の文法的働きを弁別していくうえで、数詞が名詞の上にあるか下にあるかといったようなことは、現代文では大まかすぎる分け方ではあるが、格助詞を伴わないことの多い古文にあつてはまずこのような分け方から進めていくのが有効であろう。さて、このような型が、源氏物語や平家物語においてどのように現れるのだろうか。本稿では、こういった観点から、考察を進めていくこととする。

一、古文における数詞の文法的働きと

その分類上の問題点

数詞の文法的働きを、名詞との関わり方から捉えると、「名詞との組み合わせで使用されないもの」「名詞との組み合わせで使用されるもの」に分けられ、「名詞との組み合わせで使用されるもの」には、「名詞よりも下に位置するもの」「名詞よりも上に位置するもの」に、ひとまず大きく分けることができる。本稿では、「名詞との組み合わせで使用されないもの」をA0型とし、「名詞との組み合わせで使用されるもの」で「数詞が名詞よりも下に位置するもの」をA1型・A2型といったようにAに算用数字を加えて示し、「名詞との組み合わせで使用されるもの」で「数詞が名詞よりも上に位置するもの」をA I型・A II型といったようにAにローマ数字を加えて示していくこととする。

る。また、数詞ではあるが、「一」「二」という数字のみの形で、「二人」「二人」といった「数字+助数詞」の形をとらないものをB型とする。これらの記号を用いて、源氏物語と平家物語にみられる数詞の用例を分類すると、次の十種類の型が認められる。

A0型 名詞との組み合わせで使用されないもの

A1型 名詞+数詞

A2型 名詞+の+数詞

A3型 名詞+が+数詞

A4型 名詞+と+数詞

A I型 数詞+名詞

A II型 数詞+の+名詞

A III型 数詞+が+名詞

A IV型 「二人娘」のように数詞と名詞が直接結合したもの

B型 数字のみ

ここで、それぞれの型の具体例を一例ずつ示しておくこととする。

〔A0型〕

①ふたりみるほどにと、ち、ぬしふとよりきたり。

(源氏物語 少女 大成699頁14行目)

〔A I型〕

②我ひとりさかしがりいだきも給へりけるに

〔A 2型〕

(源氏物語 夕顔 大成127頁8行目)

③御子の一人もおはせぬ事を、母の二位殿もなげき、北方大納言佐殿も、本いなきことにして、よろづの神仏に祈申され共、そのしるしなし。
(平家物語 卷十 217頁10行目)

〔A 3型〕

④其中にひおどしの鎧きたる武者が三人あじろにながれか、つてゆられけるを、伊豆守みたまひて、
(平家物語 卷第四 245頁14行目)

〔A 4型〕

⑤康頼入道と二人、ようではなき、ないてはよむ。
(平家物語 卷三 156頁4行目)

〔A I型〕

⑥三人そのこはありて、右近はこと人なりければ、思ひへだて、御ありさまをきかせぬなりけりと、なきこひけり。
(源氏物語 夕顔 大成144頁3行目)

〔A II型〕

⑦ひとりのこをいたづらになして、おもふらんおやの心に、猶このゆかりこそおもだ、しけれと思しるばかり、よいいはかならずみすべきこと、おぼす。
(源氏物語 蜻蛉 大成196頁3行目)

〔A III型〕

⑧又或夜、二人通夜して、おなじうまどろみたりける夢に、おきより吹くる風の、二人が袂に木の葉をふたつふきかけたりけるを、何となうとつて見れば、御熊野の南木の葉にてぞ有ける。
(平家物語 卷第二 128頁1行目)

〔A IV型〕

⑨或人のひとりむすめ、夫もなかりけるがもとへ、母にもしらせず、男よなくかよふ程に、とし月もかさなる程に、身もたゞならずなりぬ。
(平家物語 卷第八 79頁10行目)

〔B型〕

⑩われはこれ大聖不動明王の御使に、こんがら・せいたかといふ二童子なり。
(平家物語 卷上 第三 290頁6行目)

以上が、数詞をいくつかの型に分類し、その具体例を示したものである。ただし、個々の用例をどの型に入れるかということについては、いくつかの問題がある。その問題は、先掲の型のうち、特にA 1型、A 2型、A 3型、A II型、A III型において現れてくる。以下、このことについて説明しておく。

まず、A 1型に関する問題である。

例えば、次の文のように、助詞が記されていれば、数詞の文法的働きは比較的捉えやすいであろう。

⑪抑我朝に、しら拍子のはじまりける事は、むかし鳥羽院の

御宇に、しまのせんざい・わかのみひととて、これら二人がまひだしたりけるなり。(平家物語 巻第一 17頁7行目)

⑫これらは三人ながら伊勢国の住人なり。

(平家物語 巻第四 246頁1行目)

⑪の「これら二人が」は、格助詞「が」があることにより、これが主格であるということが分かる。⑫も、「これらは」があることにより、「三人ながら」は連用格であるということになる。ところが、問題となるのは次のように助詞の記されていない例である。

⑬御いむことのあざり三人さぶらひて、(後略)

(源氏物語 若菜上 大成1045頁3行目)

⑭そのほか御娘八人おはしき。

(平家物語 巻第一 15頁5行目)

例えば、⑬の「三人」は、「あざり三人」が主格とも考えられるし、「名詞+数詞」一体型、「あざり」が主格で、「三人」が連用格(「名詞/数詞(連用用法)')とも考えられる。⑬で、数詞の働きが二様に解釈できるのは、名詞と数詞とが連続し、しかも主格として考えることが可能な位置、すなわち述格の直上に数詞が用いられているからである。このような例は、古文の中で極めて多い⁵⁾。先の例は、「名詞+数詞」が主格にたつような場合であるが、これが連用格に現れる場合にも同様に解釈が難しいものがある。

⑮たゞそのざえかしこしときこえたるがく生十人をめす。

(源氏物語 少女 大成704頁3行目)

⑯武蔵房弁慶、老翁を一人具してまいりたり。

(平家物語 巻第九 152頁12行目)

⑰佐々木三郎守綱、浦の男をひとりかたらつて、しろい小袖・大口、しろざやまきなどとらせ、すかしおほせて

(平家物語 巻第十 251頁6行目)

⑱しのびやかに、心にくきかぎりの女房四五人さぶらはせ給て、

(源氏物語 桐壺 大成16頁5行目)

⑲侍三四人めし具して、(平家物語 巻第二 77頁16行目)

⑮の「十人」を含む句は、「めす」の連用格である。「十人」の下に格助詞「を」があるので、数詞の連用用法と考えることはできない。これに対して、⑯⑰の例をみると、いずれも数詞の前に格助詞「を」がきており、これらの数詞は連用用法であると判断される。つまり、数詞の前に「を」がくるか数詞の下に「を」がくるかによって、数詞の働きが異なってくることになる。このことを踏まえて、用例⑱⑲をみると、⑱「さぶらはせ給て」⑲「めし具して」いずれも「を」格をとることができると、実際には「を」が示されていないために⑱が「女房(を)四五人」なのか「女房四五人(を)」なのか、⑲が「侍(を)三四人」なのか「侍三四人(を)」なのかということが判断できない。

これらに対して、⑳のように連体格にA1型が立つ場合には、数詞のみを切り離して連用格と考えることはできず、「名詞+数詞」一体型である。

㉔やもめずみなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくるひたて、(後略) (源氏物語 桐壺 大成11頁13行目) さて、次に、数詞の働きが確認できるような例を、いくつかみていく。

次の例は、係助詞「は」が直下に示されることによって、「名詞+数詞」一体型であると判断できる。

㉑右の大との、四らう君、大将殿の三らう君、兵部卿にもやのそむわうの君たちふたりは万歳楽、まだいとちひさきほどにて、いとらうたげ也。(源氏物語 若菜下 大成12頁11行目)

㉒四位六人は、女のさうぞくにほそながそへて、五る十人は、みへがさねのからぎぬ、ものこしもみなけぢめあるべし。六位四人は、あやのほそなが、はかまなど、かつはかぎりあることをあかずおぼしければ(後略)

(源氏物語 宿木 大成1730頁11行目)⁶ また、次の例のように、係助詞「は」が直上に示されることによって、連用用法であると判断できるような場合もある。

㉓うちの大殿のきんだちは四五人ばかり、殿上人のなかにこゑすぐれ、かたちきよげにてうちつゞき給へる、いとめでたし。

(源氏物語 真木柱 大成98頁4行目)

(右の文中の「四五人ばかり」は、「うちつゞき給へる」を修飾している。)

さらに、助詞が示されていない場合でも、並立句をなすことによって、「名詞+数詞」一体型であると判断できるようなものもある。

㉔みこたち五人、左右おとゞ、大納言ふたり、中納言三人、宰相五人、殿上人は、れいの内、春宮、院のこるすくなし。

(源氏物語 若菜上 大成1084頁9行目)

㉕の「みこたち五人」「左右おとゞ」「大納言ふたり」「中納言三人」「宰相五人」は、並立されていると考えられる。これらは、後の「殿上人」の数を、具体的に表現したものである。五つの並立句のうち四つに数詞が使用されているが、数詞が使用されていない残りの一つは「左右おとゞ」である。A1型の他の句が「左右おとゞ」と並立されているとすれば、これらの数詞を連用用法と捉えることには無理があろう。

㉖このたのもし人なるすけ、ゆみやもちたる人ふたり、さてはしもなる物、わらはなど三四人、をんなばらあるかぎり三人、つぼさうぞくして、ひずましめくもの、ふるきげす女ふたりばかりとぞある。(源氏物語 玉壺 大成72頁2行目)

㉗の文中には、「ふたり」「三四人」等の数詞が使われており、「このたのもし人なるすけ」「ゆみやもちたる人ふたり」「しもなる物」「わらはなど三四人」「をんなばらあるかぎり三人」「つ

ほさうぞくしてひずましめくもの」「ふるきげす女ふたり」が並立句をなしており、それらが全て「とぞある」にかかっているという構造である。従って、これらの数詞も、「名詞＋数詞」一体型であると考えるのが妥当であろう。ただし、この並立句のうち、「わらはなど三四人」は、名詞に「など」がついた形と数詞が結びついたものであり、「をんなばらあるかぎり三人」は「をんなばら」と「三人」のあいだに「あるかぎり」という修飾語が入り込んでいる。このような例をみると、数詞は直上の名詞と結びつくのではあるが、両者の結びつきはゆるやかなものであって、名詞の下に数詞が置かれていると表現した方が適切なかもしれない。

以上のような、並立句であることよって、「名詞＋数詞」一体型として捉えることが可能な例は他にも多数存在するが、紙面の都合によりここでは具体例を示していくことを省かせていた

②⑤次に、「名詞／数詞（連用用法）」と考えられる例を挙げる。

②⑥きうだいの人わづかに三人なんありける。

（源氏物語 少女 大成707頁3行目）

右の例では、「きうだいの人」と「三人」の間に「わづかに」という修飾語が入っているので、「名詞／数詞（連用用法）」であることが分かる。

②⑦又、をとなびたる人いまひとりとおりて、（後略）

（源氏物語 宿木 大成1783頁1行目）
右の例は、「いまひとり」（もう一人）という形になっていることにより、「名詞／数詞（連用用法）」であると考えられる。

最後に、数詞の働きが「名詞＋数詞」一体型にも「名詞／数詞（連用用法）」にも解釈できる例をいくつか挙げておく。

②⑧よろしき女ふたり、しも人どもぞ、おとこ女かずおほかむめる。
（源氏物語 玉壘 大成737頁7行目）

②⑧の「よろしき女ふたり」は、後に続く「しも人どもぞ」と並立句をなしていない。「しも人どもぞ」は「おとこ女かずおほかむめる」に対する主格に立つが、「よろしき女ふたり」は意味上、その主格に立たず、重文構造をなすものと考えられる。ここでの「よろしき女ふたり」は、「身分の高い女（が）二人（居て）」（「名詞／数詞（連用用法）」とも、「身分の高い女二人（が居て）」（「名詞＋数詞」一体型）とも解される。

②⑨このましくなれたるかぎり四人、しもつかへはあふちのすそこの裳、なでしこのわかばのいろしたるかざぎぬ、けふのよそひどもなり。
（源氏物語 蛩 大成913頁1行目）⁷⁾

②⑨の文意は、女童は「このましくなれたるかぎり四人」居て、下仕は「あふちのすそこの裳、なでしこのわかばのいろしたるかざぎぬ」の装いをしておりというものである。「好ましくなれたるかぎり（が）四人」居てのようにも、「好ましくなれたるかぎり四人（が）」居てのようにも解釈できる。

③〇あかしの御方のは、ことくしからで、こうばいふたり、さくらふたり、あをじのかぎりにて、あこめこくうすく、うちめなどえならでさせたまへり。

(源氏物語 若菜下 大成1149頁2行目)⁽⁸⁾

この文は、「あかしの御方のは、ことくしからで、あをじのかぎりにて、あこめこくうすく、うちめなどえならでさせたまへり」が文の主述をなしており、「こうばいふたり」「さくらふたり」というのは、「あかしの御方の(女童)」の姿を具体的に述べるための、挿入句である。「こうばいふたり」を例にすれば、「紅梅(が)二人(居て)」と考えれば「名詞/数詞(連用法)」ということになる。「紅梅二人(が居て)」と考えれば「名詞+数詞」一体型ということになる。

次に、A2型であるが、これは「の」を主格表示とみるか連体格表示の「の」とみるかによって、数詞の文法的解釈も違ってくる。この型は、管見に入る限り源氏物語にはなく、平家物語に四例認められる。ここでその全用例を掲げる。

③①されば実方中将、奥州へながされたりける時、此国の名所に、あこ屋の松と云所を見ばやとて、国のうちを尋ありきけるが、尋かねて帰りける道に、老翁の一人逢たりければ

(平家物語 卷第二 109頁14行目)

③②しうの女房の院の御所にさぶらはせ給ふが、此程やうくにしてしたてられたる御装束もつてまいるほどに、只今男の二

三人まうできて、うばひてとつてまかりぬるぞや。

(平家物語 卷第六 328頁3行目)

③③その中に、かんどりの一人ねざりけるがみつ奉りて

(平家物語 卷第九 187頁7行目)

③④御子の一人もおはせぬ事を、母の二位殿もなげき、北方大納言佐殿も、本いなきことにして、よろづの神仏に祈申され共、そのしるしなし。

(平家物語 卷第十 217頁10行目)

右のうち③④を例にして考えれば、「御子の一人もおはせぬ事を」の部分の「の」については、主格表示とすれば「御子が一人もいらつしやらないことを」という意味になり、連体格表示とすれば「御子の一人もいらつしやらないことを」という意味になる。後者の意味だとすれば、「複数の御子たちの中の一人」といった意味合いが生じてようか。⁽⁹⁾この文の意味からすれば、御子は一人も生まれていないのであって、前者の意味で解釈する他無いであろう。従って、ここでの「の」は、主格表示と考えられる。他の例の「の」は、主格表示なのか連体格表示なのか判別できないが、全てを③④のように主格表示と考えても矛盾しないようである。このように「の」を主格表示として解すれば、これらの用例中の傍線を付した数詞は全て連用法ということであつて、A0型に入れるべきことになり、A2型の例は平家物語にも認められないということになるが、ここでは、尚判断の難しい例もあることから、先の四例をA2型の例として

設定しておくことにする。

次に、A3型についてであるが、この場合も「が」が主格表示なのか連体格表示なのか問題となる。この型は、平家物語に一例認められるのみである。

③⑤ 其中にひおどしの鏡きたる武者が三人あじろにながれか、つてゆらけれるを
 (平家物語 巻第四 245頁14行目)

右の例の「武者が三人」の「が」を主格表示と考えれば、「武者が、三人網代に流れ掛かって」という意味になり、連体格表示と考えれば、「武者の三人が、網代に流れ掛かって」という意味になる。ここではそのいずれとも判断できない。もし前者で考えるならば、ここでの数詞はA0型の連用用法ということになり、A3型は一例もないということになる。ここでは、A3型として用例数に入れて、後に掲げる表には示しておくことにする。

次に、AII型とAIII型について考える。

③⑥ ひとりのこをいたづらになして、おもふらんおやの心に、猶このゆかりこそおもだ、しけれと思しるばかり、よいいはかならずみすべきこと、おほす。

(源氏物語 蜻蛉 大成1960頁3行目)

③⑦ 又或夜、二人通夜して、おなじうまどろみたりける夢に、おきより吹くる風の、二人が袂に木の葉をふたつふきかけたりけるを、何となうとつて見ければ、御熊野の南木の葉にてぞ

有ける。

(平家物語 巻第一 128頁1行目)

右のうち、③⑥はAII型としたもの、③⑦はAIII型としたものである。それぞれの「の」「が」が主格表示なのか連体格表示なのかということを見ると、③⑥は「一人の子を仮初めに産んで」という意味であって「一人が、子を仮初めに産んで」という意味ではない。③⑦も「二人の袂に木の葉を二つ吹きかけ」という意味であって「二人が、袂に木の葉を二つ吹きかけ」という意味ではない。従って、ここでの「の」「が」はいずれも連体格表示であると考えられ、AII型、AIII型にそれぞれ分類させることができる。尚、ここに具体例を掲げていない他の用例も、これと同じように考えてよいものである。

以上、数詞の文法的働きの弁別における問題について、具体例をふまえて述べてきた。聊か紙面を使いすぎた観もあるが、古文における数詞の研究において、基礎となる作業でもあるので、敢えて詳しく述べておくことにした。

二、源氏物語と平家物語における数詞の型の比較

先の項で述べたように、古文においては、数詞の文法的働きを弁別する上で、いくつかの問題が存するが、その判断しがたい部分を※や*の記号を用いて、型と意味とから、検出した個々の数詞の用例を取って分類していくという作業を行った。

表一 平家物語における数詞の用法

A0型		155	B型	0
※主格 (数詞) ※主格 (ただ+数詞) ※主格 (数詞+も) ※主格 (数詞+づつ) 主格 (数詞+ともに) 主格 (都合+数詞) 主格 (数詞+が) 主格 (数詞+までが) 主格 (数詞+ばかりが) 主格 (数詞数詞+が) 主題 (数詞+は) 連用格 (数詞+を) 連用格 (数詞+をば) 連用格 (数詞+をこそ) 連用格 (数詞+とばかり) 連用格 (数詞+とは) 連用格 (数詞+として) 連用格 (数詞+とぞ) 連用格 (いく数詞+と) 連用格 (数詞+に) 連用格 (数詞+も) 連用格 (ただ+数詞+ぞ) 連用格 (数詞+づつ) 連用格 (数詞+まで) 連用格 (数詞+ながら) 連用格 (数詞+して)		2 1 1 2 1 5 6 1 1 1 2 2 1 4 2 15 1 1 1 11 1 1 1 10 5 46		

A1型	連用格 (数詞+しても) 連用格 (ただ+数詞) 連用格 (ただ+数詞+して) 述格 (数詞+なり) 述格 (数詞+なれば) 述格 (数詞+候) 述格省略 (「にて」相当)	178	10 11 1 1 3 2 2
A2型	名詞+数詞 名詞+数詞+候 名詞+数詞+は 名詞+数詞+を 名詞+数詞+と 名詞+数詞+とぞ 名詞+数詞+に 名詞+数詞+にも 名詞+数詞+こそ 名詞+数詞+ぞ 名詞+数詞+は 名詞+数詞+まで 名詞+数詞+より 名詞+数詞+して 名詞+数詞+が+名詞 名詞+数詞+の+名詞 名詞+数詞+なり 名詞+数詞+候 「助動詞相当部省略」	178	4 1 1 1 7 3 13 1 1 1 1 1 1 4 2 2 3 25 3 1 17 1 86

A 3 型	名詞＋が＋数詞	1
A 4 型	名詞＋と＋数詞	2
A 1 型	数詞＋名詞	0
A 2 型	数詞＋の＋名詞	53
	(数詞＋の＋名詞)	52
	(数詞＋まで＋の＋名詞)	1
A 3 型	数詞＋が＋名詞	4
A 4 型		2
B 型		1

※ 主格とも連用用法とも解されるもの⁽¹¹⁾
 * 「名詞＋数詞」一体型とも「名詞／数詞（連用用法）」とも解されるもの

さて、まず、表をもとにして、数詞の型の出現状況を源氏物語と平家物語とで比較すると次のようになる。

- 源氏物語のみにみられる型 A 1 型
- 平家物語のみにみられる型 A 2 型 A 3 型 B 型
- 源氏物語と平家物語の両方にみられる型 A 0 型 A 1 型 A 4 型 A II 型 A III 型 A IV 型

このように、十種類のうち六種類が源氏物語と平家物語の両方にみとめられる。源氏物語のみにみとめられる型は A 1 型だけである。これに対して平家物語のみにみとめられる型は、A 2 型・A 3 型・B 型の三種類がある。ここで、それぞれの型の

用例数を示しておく。

											源氏物語	平家物語
A 0 型											70	155
A 1 型											98	178
A 2 型											0	4
A 3 型											0	1
A 4 型											6	2
A 1 型											2	0
A 2 型											4	53
A 3 型											1	4
A 4 型											2	4
B 型											0	1

- A 0 型には主格用法と連用用法とが含まれている。
- A 1 型の源氏物語九十八例、平家物語一七八例のなかには、「名詞＋数詞」一体型とも「名詞／数詞（連用用法）」とも考えられるものが含まれている。
- A 2 型の平家物語四例の「の」は、連体格表示ではなく主格表示であると考えられる。
- A 3 型の平家物語一例の「が」は主格表示とも連体格表示とも考えられる。

右の表は、それぞれの型の出現数を、源氏物語と平家物語を比較して示したものである。それぞれの数詞の型の出現数につ

いて特徴的なことを述べておく。まず、源氏物語と平家物語ともに出現数が著しく多いのはA0型とA1型である。数詞の使い方として二作品において基本となるのは、A0型すなわち数詞単独で使用されるものと、A1型すなわち「名詞+数詞」の形で使用されるものである。とりわけ、「名詞+数詞」の組み合わせで使用されるものが多いことは注目される。数詞は、体言に属するものではあるが、名詞と違って、副詞のように連用修飾語として働くこともできるということは先にも述べたことであるが、数詞が名詞の直下に置かれて「名詞+数詞」一体型として働くことができるのも名詞とは異なる特徴の一つであろう。現代語研究では、「三人の学生が話している」と「学生が三人話している」のように、数詞が連体格に立つ用法から数詞の連用用法への遊離ということがよく問題にされるが、古文では代表的な二作品を見るかぎり、数詞の連用用法はさほど多くはないのであって、むしろ、(あえて現代文を例にすれば)「学生三人が話している」と「学生が三人話している」のように、「名詞+数詞」一体型と「名詞/数詞(連用用法)」との関わりが大きな問題となるといえよう。

さて、そのほかに、表から分かる特徴は、AII型が、源氏物語の四例から平家物語の五十三例へと、出現数の増加が顕著にみとめられることである。AII型とは、数詞が連体修飾語として働く用法である。このような用法が、なぜ平家物語で増えて

いるのか、考えておく必要はあるが、今のところこれに対する明確な解答は見いだせていない。表をみるとこの他にもA3型(「名詞+が+数詞」)が源氏物語〇例から平家物語一例へ、AIII型(「数詞+が+名詞」)が源氏物語一例から平家物語四例へと平家物語の用例数の方が増えている。これらA3型、AII型、AIII型というのは、「の」「が」という型の中に数詞が組み込まれるものである。これらの型において、いずれも平家物語での用例数が軒並み増えているということになる。他の古典作品を詳しく検索していない現段階では結論をだすことはできないが、或いは数詞の用法上の時代差として捉えることができるかもしれない。

三、数詞の用法の相互比較

ここでは、先に挙げた十種類の型のなかから、他の型との関わりにおいて問題となるものをいくつか取り上げて考察したい。まず、A I型について述べる。A I型とは、「数詞+名詞」の型をとるもので、この型は、数詞の連用用法という点において、「名詞/数詞(連用用法)」との関係が問題となろう。これは源氏物語に二例認められるのみである。現代の文章表現において、連用修飾語を被修飾語から離して、主格の上などに置くことはあまり好ましいことではない。⁽¹²⁾古文においても、数詞の連用

法は、「名詞／数詞（連用用法）」が基本であり、用例数も圧倒的にこちらの方が多い。こうみると、源氏物語にあるA I型の二例は、かなり特殊な例だといえよう。まず、その二例を掲げる。

①三人そのこはありて、右近はこと人なりければ、思ひへだて、御ありさまをさかせぬなりけりと、なきこひけり。

（源氏物語 夕顔 大成14頁3行目）

②さうしみの心ちはさはやかに、いさ、かものおぼえてみまはしたれば、ひとりみし人のかほはなくて、みなおいほうしゆがみおとろへたる物のみおほかれば、しらぬくに、きにける心ちしていとかなし。

（源氏物語 手習 大成200頁12行目）

右の例の「三人そのこはありて」「ひとりみし人のかほはなくて」であるが、これに対して「その子は三人ありて」「みし人のかほはひとりもなくて」の方が普通の表現であるといえよう。ここでは、なぜそうなっていないのであろうか。それを考えるにあたり、次の二通りの立場があろう。その一つは、この例を誤写と考え、処理するという立場である。もう一つは、青表紙本の本文を正しいとみなし、この例に積極的な解釈を試みる立場である。まず、前者の立場に立って、他の写本で当該箇所がどうなっているかを、源氏物語大成の校異により確認しておくこととする。

〔用例1の例〕

源氏物語大成 夕顔 底本 青表紙本1・大島本

三人そのこはありて（大島本）——はらからども三人ぞありける 河内本

三人そのこはありて（大島本）——ナシ 別本

〔用例2の例〕

源氏物語大成 手習 底本 青表紙本・大島本

ひとり（大島本）——ひとりも 青表紙本・榊原家本・高松宮家本

ひとり（大島本）——ナシ 別本・池田本 阿里莫本

ひとり（大島本）——ひとりもなくて 別本・高松宮家本 国冬本

ひとり（大島本）——なく 別本 池田本 桃園文庫蔵本

冬本

まず用例①であるが、これは河内本系統で「三人」は「ありける」という述語の直上に置かれている。また、別本系統では、数詞を含む句そのものが無い。次に用例②であるが、「ひとりみしひとのかほはなくて」の部分、榊原家本・高松宮家本・池田本・阿里莫本・桃園文庫蔵本では「ひとりもみしひとのかほはなくて」とあり、別本系統の高松宮家本・国冬本では「みしひとのかほはひとりもなくて」とある。前者の榊原家本等では、「ひとりも」は、述語から離れたところに置かれているが、後

者の別本系統の高松宮家本・国冬本では「ひとりも」は述語「なくて」の直上に置かれている。このように、諸本を見比べると、用例①、用例②ともに、数詞が述語の直上に置かれている本も存することになる。そうすると、用例①・用例②にみられるような、連用用法の数詞が述語から離れたところにある型は本文自体を疑ってかかる必要もあろうかと思う。さて、この考え方はひとまず置いて、次に、用例①・用例②の本文を正しいとみなし、連用用法の数詞が主格の前に置かれていることの意味は考えられないだろうか。用例①の「三人そのこはありて」とは、「西京の乳母の娘は三人いて」という意味で、用例②の「ひとりみし人のかほはなくて」とは、「一人も見知り顔はなくて」という意味である。用例①は、夕顔の宿の人々が、夕顔がいなくなった事情をあれこれと推測する場面である。まず西京の乳母の娘が三人いるという事実を指摘し、それを踏まえて右近は西京の乳母の子である三人のなかに含まれていないことを言い、右近と西京の乳母は他人であるということになり、それ故、右近が夕顔の宿の女主人である西京の乳母に「思ひ隔てて、御ありさまを聞かせぬなりけり」という結論を導き出している。ここでは、乳母の娘が三人いるということを発端にして作者が推理を進めているので、まず「三人」という人数を最初に示したというようにも解釈できる。用例②は、浮舟が意識を回復して、周囲を見回す場面である。ここでは、浮舟の目に映ったものを

最初から順に示すために、まず「一人」という人数を示したのとも考えられる。①や②に共通しているのは、数詞が「ありて」や「なくて」といった、存在の有無を表す語を修飾しているということである。ここでは、何人いるかということが、最も重要な情報であったために、まずはじめに数詞を持ってきたということも考えられる。

以上、A I型と「名詞／数詞（連用用法）」との関係について述べてきたが、この問題については、現段階では、明確な答えを見いだすがたいが、後者の方で解釈が成り立つのであれば、青表紙本の本文をそのまま生かした立場をとっておきたいと思う。この型は用例数も極めて少なく、また、当該箇所本文そのものも、諸本によって異なっていることから、これ以上詳しく分析することは困難である。今後、他の作品なども検索して、このA I型が他の作品でどの程度使用されているのかということも見極めた上で、考えてみたい。

次に、A II型（「数詞十の十名詞」とA III型（「数詞十が十名詞」）についてみていく。A II型は、源氏物語に四例、平家物語に五十三例認められる。一方、A III型は、源氏物語に一例、平家物語に四例認められる。ここで、A II型・A III型につき、用例を掲げながら、両者を比較していくこととしたい。

〔源氏物語におけるAⅡ型の用例〕

③ひとりのこをいたづらになして、おもふらんおやの心に、猶このゆかりこそおもだ、しかりけれ、と思しるばかり、よういはかならずみすべきこと」

(源氏物語 蜻蛉 大成1962頁4行目)

④ふたりの人の御心のうち、ふりずかなしく、あやにくなりし御思ひのさかりにかきたえては、いとみじければ、あだなる御心は、なくさむやなど心み給ことも、やうくありけり。

(源氏物語 蜻蛉 大成1962頁4行目)

⑤二日ばかりこもりゐて、ふたりの人をいのりかぢするこゑたえず、あやしきことを思さはく。

(源氏物語 手習 大成1996頁4行目)

〔平家物語におけるAⅡ型の用例〕

⑥四十五にてかみをそり、二人のむすめ諸共に、いつかうせんじゆに念仏して、ひとへに後世をぞねがひける。

(平家物語 巻第一 25頁16行目)

⑦四人一所にこもりゐて、あさゆふ仏前に花香をそなへ、よねもなくねがひければ、ちそくこそありけれ。四人のあまども、皆往生のそくはいをとげけるとぞ聞えし。

(平家物語 巻第一 29頁3行目)

⑧八幡に百人の僧をこめて、信読の般若若を七日よませられける最中に、甲良の大明神の御まへなる橘の木に、男山の

方より山鳩三飛来ツて、くいあひてぞ死にける。

(平家物語 巻第一 43頁13行目)

〔源氏物語におけるAⅢ型の用例〕

⑨すべて十二人が中に、かたほなるなく、いとおかしげに、とりくにおひいでたまける。(源氏物語 夕霧 1375頁10行目)

〔平家物語におけるAⅢ型の用例〕

⑩又或夜、二人通夜して、おなじうまどろみたりける夢に、おきより吹くる風の、二人が袂に木の葉をふたつふきかけたりけるを、何となうとツて見ければ、御熊野の南木の葉にてぞ有ける。

(平家物語 巻第二 128頁1行目)

⑪平家の人々は、宮井に三位入道の一族、三井寺の衆徒、都合五百余人が頸、太刀・長刀のさきにつらぬき、たかくさしあげ、夕に及て六波羅へかへりいる。

(平家物語 巻第四 249頁16行目)

⑫岡の御所と申は、あたらしくつくられたれば、しかるべき大木もなかりけるに、ある夜おほ木のたふる、音して、人ならば二三十人が声して、どつとわらふことありけり。

(平家物語 巻第五 275頁9行目)

⑬又其夜、六波羅の南にあたツて、人ならば二三十人がこゑして、「うれしや水、なるは滝の水」という拍子を出してまひおどり、どつとわらう声しけり。

(平家物語 巻第六 348頁8行目)

以上、「数詞十の十名詞」「数詞十が十名詞」の用例を掲げた。両者の違いとしては、前者の名詞が「子」「人」「娘」といったような人物を表す名詞であるのに対して、後者の方は「袂」「頸」「声」といったように人物そのものではなく、人物の一部やその人物より発せられる声といった名詞になっているという点である。源氏物語の「数詞十が十名詞」の一例は「中」であるが、これも数詞が示す人数に関わる人物とは、無関係の名詞である。さて、「の」「が」の連体格表示の用法には、待遇上の違いがあることも従来から指摘されている。¹³⁾次に、この観点から、検討しておく。⑩の「二人」という数詞が表している丹波少将と康頼入道とはともに罪人として流罪の身の上である。⑪の「五百余人」は平氏によって討ち取られた人々である。⑫と⑬の「三十人が声」とは、物の怪の声を表している。このように、連体格表示の「が」の上に位置する数詞が表しているものは、罪人や謀反人、物の怪である。連体格表示の「が」は敬意が下がる人物に付されるということは従来よりよく指摘されていることであるが、同じことは「が」の上に数詞が置かれる場合においても確認することができる。ただし、源氏物語の例の、「十二人が中」の「十二人」とは、夕霧と雲居雁、夕霧と藤典侍との間に生まれた十二人の子どもたちを指しており、敬意が下がる人物たちとは思われないが、或いは子どもたちということだけで「が」を使ったものかとも考えられる。

最後に、A0型とA1型について、比較する。A0型とは、数詞が単独で主格になったり連用格になったりするような型であり、A1型とは、名詞の直下に数詞が置かれる型である。ここでは、A0型のうちの「名詞/数詞(連用用法)」であることが確認できる例と、A1型のうちの「名詞十数詞」一体型であることが確認できる例との比較である。敢えて現代文を例にすれば、前者が「学生が三人話している」のような例で、後者が「学生三人が話している」のような例である。

〔A0型〕

⑭さうだいの人わづかに三人なんありける

(源氏物語 少女 大成707頁3行目)

⑮又をとなびたる人いまひとりおりて

(源氏物語 宿木 大成1783頁1行目)

⑯まだをさなきなどすきくに五六人ありければ

(源氏物語 東屋 大成1793頁8行目)

⑰わらはしもつかへ八人づゝさぶらふに

(源氏物語 宿木 大成1780頁14行目)

〔A1型〕

⑱この人ひとりこそむつまじくもあらめ。

(源氏物語 夕顔 大成128頁5行目)

⑲この君ひとりぞひめ君の御ひとつはらなりける。

(源氏物語 紅葉賀 大成261頁11行目)

⑳人ひとりか、あまたしもみたまはぬことなればにや、たぐひなくおほしこがれたり。(源氏物語 葵 大成305頁1行目)

㉑兵部卿のみやのそむわうの君たちふたりは万歳楽まだいとちひさきほどにて、いとらうたげ也

(源氏物語 若菜下 大成1216頁12行目)

以上、「A0型」「A1型」のいくつかの例を示した。「A0型」に特定できる例のうち、⑭⑮⑯は「わづかに三人なん」「いま一人」「すぎすきに五六人」のように数詞に修飾語がついたものである。⑰「きうだいの人わづかに三人なんありける」は、「わづかに」があることよって「三人」であるという事実に加えて「少ない」という書き手の判断が下される。⑱「おとなびたる人いま一人下りて」が、もし「おとなびたる人一人下りて」とあるならば、文の意味が異なってくる。前者は、「一人いるうえにさらにもう一人」という数の変化を表しているが、後者は単に「一人」という人数の事実のみを表している。⑳も、「すぎすきに」(次々に)があることにより、「五六人」は数の変化を表していることになる。㉑は、数詞に「づつ」という接尾語がついた形であるが、それによって数詞は数の変化を表すものとして使われている。これらの例のように、修飾語が数詞についたり接尾語などがつくことによって、数詞は単に人数の事実のみを表すのではなく、その人数に対して評価が加えられたり、人数に変化が生じたりすることになる。「名詞+数詞」の型にお

いて、単独で数詞が使われているものは、管見に入った限りにおいて、全て直上の名詞の人数に関する事実のみを表している。このような数詞を直上の名詞との結びつきが強いとみて、先の人数的変化や人数に対する評価と関わるような数詞(「名詞/数詞(連用用法)」)と区別して、「名詞+数詞」一体型の方で考えることはできないだろうか。

次に、先に挙げたA1型の例⑱⑲⑳㉑であるが、これらには数詞の直下に「こそ」「ぞ」「か」「は」といった係助詞が付いており、大きな意味の切れ目がそれらの助詞の下にあると判断される。従って、これらの例は、「名詞+数詞」一体型だということになる。このように、数詞の直下に係助詞が付く例がある一方で、例えば⑱「この人(こそ)ひとり」⑲「この君(ぞ)ひとり」⑳「人(か)ひとり」㉑「そむわうの君たち(は)ふたり」のように係助詞が「名詞の直下・数詞の直上」に位置するような例は、源氏物語、平家物語をみた限りにおいては、管見に入らなかった。このことは、A1型すなわち「名詞+数詞」は、名詞と数詞の間を切ることができないことを示しているよう。このようなことから判断して、他のA1型も、「名詞/数詞(連用用法)」ではなく、「名詞+数詞」一体型とみるべきであろう。以上のことを総合すると、古文においては、A1型が数詞の使い方の基本型ともいえるのであるが、この型は形のうえからでは「名詞+数詞」一体型とも「名詞/数詞(連用用法)」とも

区別ができないことが多い。しかし、この型における数詞の働き、係助詞のつき方から判断して、いずれも「名詞＋数詞」一体型とみるべきものようである。とするならば、古文における数詞の使い方は、「名詞＋数詞」一体型が基本型であり、数詞単独の連用用法の用例数は希少であるといえよう。数詞が連用用法となるのは、修飾語が付されていたり、「づつ」といった変化を表す接尾語を付した形に限られるのではないだろうか。

ま と め

本稿では、古文における数詞の用法について、源氏物語と平家物語を資料として述べてきた。得られた数詞の用例を、数詞単独で使用される場合と名詞と関わらせて使用される場合とに分け、後者をさらに名詞より上に置かれるものと名詞より下に置かれるものとに分け、合計十の型に分類した。そして、それらの型が、源氏物語と平家物語にどのように現れるかを表にまとめた。その結果、型の出入りは、両作品において、顕著な違いは認められなかったが、「数詞十の・が十名詞」「名詞十の・が十数詞」のような数詞の使い方が、平家物語で軒並み用例数を増やしているという結果が見いだされた。また、古文における数詞の使われ方としては、「名詞＋数詞」一体型の用法がそのほとんどを占めているとも考えられた。

さらに、連用用法の数詞が述語の直上に置かれるものと主格より前に置かれるもの、「数詞十の十名詞」と「数詞十が十名詞」など、お互いに関連のある型を比較した。連用用法の数詞が主格より前に置かれる型については、用例数も二例と少ないこと、諸本により文の異同があることなどから、これをもって、数詞の一般的な使い方とすることはできないと判断した。数詞が「の」の前に置かれる型と「が」の前に置かれる型との比較については、従来の指摘通り、待遇上の差が認められた。

古文では格助詞が記されない場合も多く、個々の用例を型として分類することは容易ではない。このような事情から、古文における数詞の用法を考察していくことは、困難な面が存する。しかし、数詞の使い方方を歴史的に見ておくことは、現代語の数詞の問題を考えるうえでも重要なことであろう。今回の考察では、源氏物語と平家物語の二作品をとりあげたのみではあるが、古文における数詞の使い方方の概要は捉えることができたとと思う。ただし、それぞれの型の現れ方については、今後検索文献を多くして詳細なものにしていく必要があると考えている。

注

(1) 「昔、おとこありけり」といったように、時を表す体言にも、連用用法があることは、橋本進吉博士等によって指摘されている。(吉沢義則博士は、これを特に時詞と名付けられた。)従って、厳密に言えば、連用用法は体言のうちの数詞のみの特徴ではないことになる。尚、数詞と時詞との違いについての御論考

としては、川端善明氏「数・量の副詞——時空副詞との関連——」(『国語国文』第36巻第10号 1967年10月)、佐治圭三氏「時詞と数量詞——その副詞的用法を中心として——」(『月刊文法』2・2 12・8 1969年12月)、吉原奈穂子「数量・時の表現を扱う文法」(『日本文学』75 東京女子大学 1991年3月)などがある。

(2) 管見に入った主な論文には、次のようなものがある。

川端善明氏「数・量の副詞——時空副詞との関連——」(『国語国文』第36巻第10号 1967年10月)

佐治圭三氏「時詞と数量詞——その副詞的用法を中心として——」(『月刊文法』2・2 12・8 1969年12月)

神尾昭雄氏「数量詞とシNTAX」(『言語』6 1977年12月)

吉原奈穂子氏「数量・時の表現を扱う文法」(『日本文学』75 東京女子大学 1991年3月)

宇都宮裕章氏「数量詞の機能と遊離条件」(『共立国際文化』7 共立女子大学 1995年3月)などがある。

右の論考は、いずれも現代語の観点から数詞の連用用法などに関わる問題を扱ったものである。川端氏は、時間・空間の副詞との関連で、数詞の性質を論じられた。そして、度数数詞・時間量数詞と時間量副詞との関連性、個数数詞と主語の複数性を量的に把握した副詞との関連性などについて述べられ、「数詞もまた、有属文から系列的に連続し、直接には程度・陳述副詞の時空体制に沿った外面化として、そう言っつてよいならばやはり副詞なのである」と結論づけられた。佐治氏は、例えば「学生三人と行った」が「学生と三人行った」と言えないのは、「これらの数量数詞が十分には副詞的でなく、まだ名詞性が強いからであろう」とされ、さらに、なぜ名詞が助詞をとまわずに連用的に用いられるかといえは、「数え量らるべきうえの名詞と数量数詞が同じ格に立つから」であると結

論づけられている。また、神尾氏は、「三人の学生がつかまつた」と「学生が三人つかまつた」のような例を、日本語の變形という観点から論じられた。吉原氏も、「一ヶ月旅行した」と「一ヶ月の旅行をした」を例に挙げ、「一ヶ月」という体連語が情況語に転用されていると考えて、これを文法的に説明しようとした。また、宇都宮氏も同じような現象について、連体用法から連用用法へと遊離できるものと遊離できないものとの間の条件を詳しく設定され、法則化を試みられた。

(3) 名詞にあたる部分には、修飾語を伴ったような名詞句やいわゆる準体言などがくることもある。

(4) (3)に同じ。

(5) 表二・表三の※や*を参照のこと。

(6) 「四位六人」「五位十人」「六位四人」の「四位」「五位」「六位」は官位を示す名詞で、人物そのものを表してはいないが、本稿ではこのような例も、「四位(の)人」「五位(の)人」「六位(の)人」「四人」のように解釈して、考察の対象の中に含めた。

(7) 「このましくなれたるかぎり四人」も、「このましくなれたるかぎり(の)人」「四人」と考え、A1型の中に入れた。

(8) (6)と同じように、「こうはい」「さくら」も人物そのものを表す名詞ではないが、これを「紅梅襲を着た人」「桜襲を着た人」と解し、A1型の中に入れた。

(9) ①一人の友達を失った。

②友達の人を失った。
右の現代文で、①と②の違いは、①は失った友達の数が一人であることを表しており、他に友達がいるかどうかは問題にならない。②は、失った友達は何人かのうちの一人だということを表している。

(10) 「二人当千」のような熟語や、「一人(イチニン)」で天子を

意味するような例は、用例数には入れない。尚、これらの例は、平家物語の方にのみ現れるものである。

(11) A1型のなかには、数詞が主格とも連用用法とも解されるような例が多数ある。例えば、次のような例である。

①ふたりみる程に、ち、ぬしふとよりきたり。(源氏物語 少女 大成699頁14行目)

②二人指し向ひて泣きけり。(源氏物語 玉鬘 大成74頁2行目)

右の「二人」はいずれも、主格とも連用用法とも解される。もともと、主格も連用修飾語としてとらえることもできるであり、主格を表す格助詞が示されず、数詞の用法に主格用法と連用用法とがある以上、数詞単独で述格の直上に位置するような場合は、全て主格とも連用用法とも区別がつかないということになる。

(12) 森岡健二著「文章構成法——文章の診断と治療——」によれば、連用修飾語から離れた位置に置かれた文は、治療の対象とされる。

前掲の書、203頁「効果的な文——文の構造／＼43位置の不適切な修飾／＼連用修飾語の場合」を参照されたい。

(13) 「の」「が」の待遇表現に関する主な御論考としては、次のようなものがある。

小林好日「助詞『が』の表現的価値」(『国語学の諸問題』昭和16年 岩波書店)

青木伶子「奈良時代に於ける連体助詞『ガ』『ノ』の差位について」(『国語と国文学』昭和27年7月)

山崎久之「助詞『の』『が』の表現的価値——尊卑説批判——」(『群馬大学紀要』二 昭和28年3月)

寿岳章子「室町時代の『の・が』——その感情価値表現を中心——」(『国語国文』昭和33年7月)

東郷吉男「平安時代の『の』について——人物をうける場合——」(『国語学』75 昭和43年12月)

春日正三「日蓮聖人ご遺文の国語学的研究(3)——助詞『の・が』の待遇意識——」(『立正大学人文科学研究所年報』七 昭和44年12月)

Usage of Numbers in the Expression of the Number of Persons

—based on “The Tale of Genji” and “The Tale of Heike”—

Yasushi YUNOKI

Abstract

In the grammar of Japanese, numbers are classified as Taigen or a part of speech which includes nouns and pronouns. Like adverbs, however, numbers modify adjectives and verbs; besides, following the noun, they also function as a case marker indicating the subject of a sentence or joining a phrase or sentence.

This paper studies numbers as they are used in classical Japanese. It is among findings that numbers are combined with nouns to function as case markers; that is their traditional main usage.